



IDÉE
Life in Art 02

TAGAMI タガミ 田上 允克

2016年4月1日(金)～27日(水)

植物、緑色に塗られた顔、空飛ぶ犬、地形…作品の創作対象の背景について詳しく聞くと「いや、それは違う」という答え。インスピレーションの元も、テーマやスタイル、意図も持たず、ただ内面からあふれ出てくるものをそこにあった色の絵の具で表現しているだけであると。見る人を圧倒するような力強さ、不思議な魅力をもつ田上氏の作品の背景を伺いました。

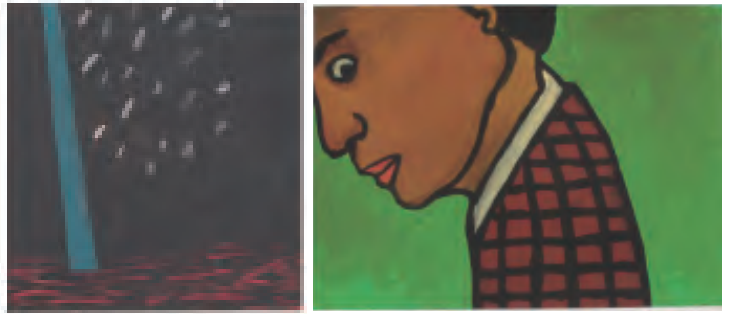
「二子玉川に、むかし通っていた”せいたい協会”の建物がかかわらずあったんだよ。」と嬉しそうに微笑みながら私たちの前に現れた画家・TAGAMI（田上允克）氏。えっ生態？整体？と、突然の言葉に、少し緊張していた私たちは拍子を抜かされ、笑いが溢れ、とても和やかな出会いの場となりました。田上氏が40代の頃、当時はまだ珍しいとされていた中国の「氣」について、興味があり少しの間”整体協会”に通われていたそうです。作品同様に、田上氏ご本人の穏やかで不思議な魅力に惹き寄せられるように、お話はスタート。田上氏ご本人と作品が生まれた背景についてお聞きしました。

天職との出会い

田上氏は、1944年山口県小野田市に生まれ、現在71歳。大学で哲学を学んだ後、何にも興味ももてず、仕事にも就かず、ただ、ただ、ずっと家にいた20代。映画を見ても、海外にいても、意見というものが一切ない人間だったといいます。当時は高度成長期の最中、しかも田舎の小さな町ではなかなか希有な存在だったはず。体裁を気にかけていた母からの言葉もあり、29歳で上京。新聞配達の仕事についてまもないある日、偶然入った目黒のアトリエ（鷹美術研究所）で、絵を描くことの楽しさに取り憑かれました。すぐに父親に電話をして、「やりたいことが見つかった。仕事をしながらなんて到底できないことだから、一生面倒をみてください」と頼む。「私が死んだらどうするんだ」という父の言葉に「その時は自分も死ぬ」との答えに、父親もただならぬ熱量を感じたのか承諾したそうです。そのまま就いたばかりの仕事辞め、以来、40年以上も休むことなく毎日毎日、数枚もの作品を生み出しています。「毎日、描いているよ。去年は毎日10枚ずつ描いていたかな。」と、平均して年間2千枚くらいの作品を描きつづけている田上氏。作品に記されている番号は、日付とその日描いた枚数で、独自のカウントで表記したシリアル番号。これまで生み出してきた作品数は、ざっと4万点は超えるそうです。描くことにしか興味がなく、また描くことに没頭していたため、展覧会で発表することも少なく、これらの作品のほとんどは、現在のアトリエである小野田市の実家の蔵に收藏されています。

尽きることのない好奇心

昔は、内面から溢れでてくる創作意欲に対して、「時間が足りない」と、追い立てられるように作品づくりに没頭していました。油絵や版画も制作しますが、制作に時間がかかり描きたい頭のスピード感が物理的に追いつかないため、身近な紙に描き、構図を考え台紙に貼っていくという現在のスタイルが多くなったといいます。今ではだんだんとその追い立てられる感覚が薄れ、描くことが日常の一部となり、その瞬間思い浮かんだものを体が動くままに、描いていけるようになったそうです。なぜそこまで絵を描くことにのめり込んだのか、そんな問いに田上氏は、「わかる面白さ」と話します。学問と同じように、描いていくときに「こういうことなんだ！」と理解していく面白さ。誰のためでもなく、自分のためでもなく、ただ、描くことに対する好奇心、探究心が、エネルギーを絶やすことなく40年以上も、手と感覚を突き動かしてきたようです。



描き続けることで得た感覚

田上氏の作品は、抽象画から、漫画風なものまでと多様です。描かれているモチーフもまた、人の顔・動物・線・記号とさまざま。創作対象の背景について詳しく聞くと、「いや、それは違う」という答え。インスピレーションの元も、テーマやスタイル、意図も持たず、ただ内面からあふれ出てくるものをその瞬間、瞬間感じたままに絵の具で表現しているだけで、創作対象そのものへの深意はないとのこと。田上氏の作品は、絶妙な構図と独特の色彩が印象的で、どれも力強く、不思議な魅力に引き寄せられます。四角い紙の中で、配置される人の顔や迷いのない意志をもった線。手の近くにある色を使っているだけで色に特別な意味はないというが、たくさんの色をつかっても散漫することなく美しくまとまっています。田上氏が、絵を描き始めたころ、画集を開いたり、展覧会を見にいったが、何がよいかわからなかったそうです。そこで、他の作品は見ずに、数年間ただひたすらデッサンすることに集中したとのこと。すると頭の中でモチーフとなるパーツを動かせるようになり、デフォルメした人物の絵に対しても、これ以上描くと人間ではなくなるという感覚がわかるようになったと。その後、マチスやピカソの展覧会を見に行く機会があり、その作品の素晴らしさに衝撃を受けたそうです。誰に教わったわけでもなく、偉大なる先人に影響を受けたわけでもない、自分で手を動かすことで、自身の目も育っていったようだ。ただ純粹に描き、数をこなしたことによって辿りついた感覚なのかもしれません。

最後に、田上氏から「仙人入門」という中国の仙道の修行法について書いてある本を紹介してもらいました。またも意表をつかれた感じでしたが、お話の後ではなんだかしっくりときました。

田上氏は、独自の生き方で、ただひたすら描くことだけに没頭してきました。それは、とても特別な環境だったと思います。田上氏は、自分で欠陥人間だと笑いながらお話ししますが、仙道修行のように、煩悩に惑わされることなく、現在も小野田市にある日本家屋のアトリエで、まっとうに絵を描くことだけを探求し続けているのかもしれない。

今回IDÉEでは、田上氏のアトリエに收藏してある膨大な作品の中から、部屋に飾ることを意識して、作品を62点セレクトしてきました。人物、動物、抽象画とさまざまです。作品をどのように感じるかは私たちに委ねられています。